

ヘミングウェイ・コードの問題

——「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」論——

日 下 洋 右

The Problem of the Hemingway Code:
An Essay of “The Short Happy Life of Francis Macomber”
Yosuke KUSAKA

「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”) (1936)¹ は、ヘミングウェイ・コードが最も具体的に表現された作品であるとみられている。この短篇はコード・ヒーローという掟に生きる強者からヘミングウェイ・ヒーローが掟を習得して、自己変革をとげるプロセスが劇化された典型的な作品とみなされているからである。他方、この作品を掟をめぐる二通りのヒーローが織りなす物語という観点からみるのではなく、的確で公平な判断を下す指導者あるいは審判者が、男として未熟な主人公を指導し援助して男らしい男に変身させる物語とする見方もある。いずれの見方に立とうとも、各々の解釈が説得力を持つためには、コード・ヒーローまたはそれに相当する人物は、その地位と任務に相応しい人間であるという前提が成り立たなければならない。

しかし、テキストを入念に検討し、この人物を再考するならば、彼が自己中心的で倫理観に欠けた抜け目のない人間であることは否定できない。それ故、掟を備えた人物あるいは適切な判断を下す指導者や審判者などみなすには、彼は人間的にみて不適格で信頼性に欠ける存在であると結論せざるをえない。この人物の人間性もヒーロー性や指導力や判断力も信用できないとすれば、彼から掟を授けられたり、指導や助力を得たりして、妻の支配に屈するような気の弱い主人公が男らしい男に変身するという図式も根底から崩れることになる。本論では、主役の豹変はコード・ヒーローの勇気や名誉を学んだ結果でも、理想的な指導者あるいは審判者のすぐれた教えや判断を受けた結果でもなく、この人間性と人倫の欠如した非情な人物に対する主人公の適愾心に燃えた反発から生じたものであることを明らかにしようとする。

「掟」(“code”) という概念をヘミングウェイ文学の分析に最初に導入した批評家は、おそらくエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) (1895—1972) であろう。ウィルソンは「ヘミングウェイ——徳行の規準」(“Hemingway: Gauge of Morale”) (1947)² の中で、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*) (1926) の語り手兼主人公ジェイク・バーンズ (Jake Barnes) と女主人公ブレット・アシュリー (Brett Ashley) の生き方に掟をみつけたしている。ウィルソンは二人の「してよいこと」と「してはいけないこと」とをわきまえた行動原理こそ、二人が生きてゆくための掟であり、人々を区別するための規準なのだと主張する。ウィルソンはこの掟が『日はまた昇る』の翌年に出版された短篇集『女のいない男たち』(*Men Without Women*) (1927) の精神的支柱を形成しているとみて、掟の概念をさらに明確化しようと試みている。

This code still markedly figures, still supplies a dependable moral backbone, in Hemingway's next book of short stories, *Men Without Women*. Here Hemingway has mastered his

method of economy in apparent casualness and relevance in apparent indirection, and has turned his sense of what happens and the way in which it happens into something as hard and clear as a crystal but as disturbing as a great lyric. Yet it is usually some principle of courage, of honour, of pity—that is, some principle of sportsmanship in its largest human sense—upon which the drama hinges.³

ウィルソンは掟を「勇気、名誉、同情の原理」、わかりやすくいえば、「スポーツマンシップの原理」と結論づけている。ウィルソンは『女のいない男たち』の中から「敗れざる者」(“The Undeafated”) (1925)、「追い抜き競争」(“A Pursuit Race”) (1927)、「簡単な質問」(“A Simple Inquiry”) (1927) を取り上げて簡単にコメントしているが、掟の観点から具体的に議論を展開せずには終っている。

コードの問題に関してエドモンド・ウィルソンの立場を踏襲している批評家は、ロバート・ペン・ウォーレン (Robert Penn Warren) (1905—89) である。たとえ敗北することになろうとも、正々堂々と闘って潔く敗れるという姿勢がヘミングウェイ文学のヒーローたちの生き方である、とウォーレンはみている。この行動様式が掟あるいは名誉の原理の根底をなしており、さらに、この原理が人間を人間らしくする基本原理になると同時に、この様式に従う人と従わない人とを区別する基準ともなる、とウォーレンは主張している。ウォーレンもこの原理をウィルソンのいう「スポーツマンシップの原理」と言い換えて、先達と同じ結論に達している。

His [Hemingway's] heroes are not squealers, welchers, compromisers, or cowards, and when they confront defeat they realize that the stance they take, the stoic endurance, the stiff upper lip mean a kind of victory. If they are to be defeated they are defeated upon their own terms; some of them have even courted their defeat; and certainly they have maintained, even in the practical defeat, an ideal of themselves—some definition of how a man should behave, formulated or unformulated—by which they have lived. They represent some notion of a code, some notion of honor, that makes a man a man, and that distinguishes him from people who merely follow their random impulses and who are, by consequence, “messy.”⁴

ウォーレンは「スポーツマンシップの原理」に則った生き方をする登場人物を次のように具体的に例証して、ウィルソンの粗描を乗り越えている。仲間と恋人を逃した後、敵の砲撃で重傷を負う『誰がために鐘は鳴る』(For Whom the Bell Tolls) (1940) の主人公ロバート・ジョーダン (Robert Jordan)。失態を重ねて観客にやじられながらも無謀な闘牛を続行して致命傷を負う「敗れざる者」の老闘牛士マヌエル・ガルシア (Manuel Garcia)。ライオン狩りでは怯えて臆病な性質を曝けだすが、水牛狩りではプロのハンターの掟を見習って勇敢な男に豹変する「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」の主人公フランシス・マコーマー (Francis Macomber)。掟に従って生きる『日はまた昇る』のジェイクと、駆け落ちまでするが破滅させまいと決意して若い闘牛士との愛を諦めるブレットなど。ここで取り上げられている登場人物には、ヘミングウェイ・ヒーローに当たる人物 (マコーマー) と、コード・ヒーローに当たる人物 (ジョーダン、マヌエル、ジェイク、ブレット) が混在していることからみて、二種類のヒーローの区別にまでは踏みこまれていないことがわかる。マコーマーの物語では、白人ハンターのロバート・ウィルソン (Robert Wilson) が掟の体得者であり、顧客のマコーマーに影響を行使するガイド役であることは見抜かれてはいるが、二通りのヒーローの見地から二人の人物が捉えられてはいない。これは、ウォーレンが

二様のヒーローの存在にまでは気づいていないことを示している。

エドモンド・ウィルソンとロバート・ペン・ウォーレンの掟に関する考察をさらに発展させ、コード・ヒーローとヘミングウェイ・ヒーローの概念をヘミングウェイの作品分析に導入した批評家は、フィリップ・ヤング (Philip Young) である。

Obviously something was needed to bind the wounds these experiences had made in that personality, and for that reason there is another “I” in the Hemingway short stories, a minor figure who is a kind of spectator or reporter. This man is not Hemingway, is not the hero, and is not even a center of interest. Instead he observes a man, not the hero either, who in importance rates second only to the hero himself. This man changes form—his profession and even his nationality—much more than the hero ever will, but he is still a consistent character in that he always introduces and exemplifies a theme in the author’s work that has rightly been made a good deal of. This is the Hemingway “code”—a “grace under pressure.” It is made of the controls of honor and courage which in a life of tension and pain make a man a man and distinguish him from the people who follow random impulses, let down their hair, and are generally messy, perhaps cowardly, and without inviolable rules for how to live holding tight.⁵

ここでヤングは「掟」をヘミングウェイ・コードと呼び、「せっぱつまった状況下でありながら気品を忘れぬ態度」と定義している。ウィルソンからウォーレンへと引き継がれた考え方に沿って、ヤングはこの掟を名誉と勇気の支配を受ける基本原理と捉えている。さらに、ウォーレンの主張を敷衍して、この名誉と勇気は緊張と苦しみで満ちた人生で、人間を人間らしくする源泉であり、掟を持つ人と持たぬ人を区別する尺度である、とヤングは結論づけている。ヤングはウォーレンの見方をさらに一歩進めて、このような掟を備えた人物をコード・ヒーロー（掟に生きる強者）と呼び、ヘミングウェイ・ヒーロー（ニック・アダムズまたはそれに相当する人物）の抱えている問題の解決法を示す役目を果たすと主張している。

This code is very important because the “code hero,” as he is usually called, presents a solution to the problems of Nick Adams, of the true “Hemingway hero,” and for Hemingway it was about the only solution. He found this code operating among various sporting figures, and he wrote several short stories the intention of which is to formulate the basic principles of the code by illustrating it in action.⁶

ヤングはコードを心得たヒーローをヘミングウェイの作品に登場する様々なタイプのストイックなスポーツマンにみつけたし、彼らの生き方や行動にコードの基本原理が機能していることを明らかにしている。ヤングはコード・ヒーローの具体的な例として、「5万ドル」(“Fifty Grand”) (1927) に登場するウェルター級のボクサー、「賭博師と尼とラジオと」(“The Gambler, the Nun, and the Radio”) (1933) に登場する我慢強い賭博師、フランシス・マコーマーの物語に登場するハンター兼ガイドを取り上げて、コードとの関係を詳細に考察している。

これらの短篇の中でも、掟やコード・ヒーローとヘミングウェイ・ヒーローの関係が体系化された物語として、特にヤングが精細な分析の対象としている作品がフランシス・マコーマーの物語である。というのも、この短篇は、主人公が掟の価値を認識するに至る過程を描いた典型的な作品と

みなされているからである。この物語では、最初ヘミングウェイ・ヒーローのマコーマーは、妻の尻に敷かれた優柔不断で臆病な男として登場するが、襲ってきたライオンから脱兎のごとく逃げだすという恥曝しな体験を経て、コード・ヒーローのハンター兼ガイドから掟を習得し、勇敢な男らしい男に変身するというプロセスが辿られている。マコーマーはガイドの指導の下で勇氣と名誉を奉じることが学び、男としての威信を取り戻すが、彼の妻は夫に対する支配が不可能になることを恐れて、夫の頭部のつけ根に弾丸を打ちこむのである。このように、ヘミングウェイはこの作品を通じて、ヘミングウェイ・ヒーローの恐怖心と勇氣の問題を極端な形で投影してみせたのだ、とヤングは力説するのである。

ロバート・W・ルイス (Robert W. Lewis, Jr.) は、フランシス・マコーマーの物語にフロイトの心理学やトリストラムとイゾルデの神話を援用し、独創的な分析を試みていて興味深い。掟とヒーローの問題ではヤングの見解を受け継いでいる。ルイスはガイドのウィルソンをコード・ヒーロー、マコーマーをヘミングウェイ・ヒーローとみて、マコーマーがガイドから掟の手解きを受けて、成熟した男に成長するというヤングの図式を継承し、それ以上の問題意識がみられないからである。

Following the pattern of other Hemingway heroes who undergo an initiation or learning experience, Macomber changes at this point. He had been obsessed with learning to do things right, and Wilson is the man of the code, the man who does things right. From the very first page this is clear.⁷

スコット・ドナルドソン (Scott Donaldson) は、フランシス・マコーマーの悲劇を「スポーティング・コード」(“sporting code”) がドラマ化された作品とみなして、掟の問題に言及している。「スポーティング・コード」はエドモンド・ウィルソンが主張し、ロバート・ペン・ウォーレンが容認した「スポーツマンシップの原理」と同義語であるとみてよい。ドナルドソンは「スポーティング・コード」も、「スポーツマンシップの原理」と同様にサファリの行動原理として機能し、この原理を身につけたガイドがそれをマコーマーに授ける役目を果たしていると主張している。この意味では、ドナルドソンの捉え方は、ヤングの考え方と同一線上にあるといえよう。

Macomber wanted, in the first place, to shoot the lion from a car, but his guide Robert Wilson, who knows and teaches the proper ethics, says simply, “You don’t shoot them from cars.”⁸

ヘミングウェイ文学の研究の基礎を築いたという点では、フィリップ・ヤングと双璧をなす批評家カーロス・ベイカー (Carlos Baker) は、ガイドのウィルソンを審判者の役目を果たし、雄々しい男の手本を示す人物とみている。それ故、ベイカーはウィルソンをマコーマーが臆病者から勇敢な男に豹変する過程で、彼の変身に手を貸す助力者としての任務を帯びた重要人物と捉えているのである。

The yardstick figure, Wilson, a fine characterization, is the man free of woman and of fear. He is the standard of manhood towards which Macomber rises, the cynical referee in the nasty war of man and wife, and the judge who presides, after the murder, over the further fortunes of Margot Macomber.⁹

ペイカーの見方によれば、水牛狩りの最中に、死んだものと思われた水牛が草むらから姿を現わして突如襲ってきたとき、弱腰な性格を克服して自信を取り戻したマコーマーが、水牛に果敢に立ち向かって射撃を繰り返す有様は、マコーマーに勇気を授けたガイドの指導と助力の賜であるとされる。夫の豹変を感じ取って夫婦の支配関係が逆転するのを懸念した妻は、背後の車上から夫の頭蓋骨の底部に弾丸を打ちこみ、その瞬間に夫は短い幸福な生涯を終える、とペイカーは結論づけている。ペイカーはプロのハンターをマコーマーの生き方の目標となる理想的な男性像とみなしている。ヤングのようにこのハンターを掟の観点から考察していないにしても、ハンターの任務と評価に関しては、ヤングと共通した認識に立っているとみてよい。逆説的にいえば、両批評家からみると、ハンター兼ガイドは指導者として理想的な人物像とされ、その人間性や倫理観に関しては、いささかとも疑いの目が向けられていないのである。

ネイサン・スコット (Nathan Scott) は、「アーネスト・ヘミングウェイ——批評」(“Ernest Hemingway, A Critical Essay”)の中で、短篇集『第五列と最初の四九の短篇』(*The Fifth Column and the First Forty-Nine Stories*) (1938)の中から、「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」に焦点を当てて考察を加えている。¹⁰ スコットは基本的にはペイカーと同じ観点に立脚しており、エドモンド・ウィルソンからロバート・ペン・ウォーレンを経てヤングへと受け継がれたヘミングウェイ・コードと二種類のヒーローの見地から、この物語を分析しようとする態度を取っていない。マコーマーが名誉の厳しい基準を自分のものにするに失敗を重ねるが、最終的にはガイドの指導の下で名誉を会得する、とスコットはみているからである。

... we may find in “The Short Happy Life of Francis Macomber” yet another example of the “ruined” man, of the man who, having failed to internalize within himself an exacting standard of honor, inevitably caves in under the pressure of the slightest adversity. There does, of course, finally come a time when this young American sportsman, Francis Macomber, appears to have won the necessary virtues, under the guidance of the hunter Wilson; but, throughout most of the story, he is constantly failing all the crucial tests.¹¹

ジャクソン・J・ベンソン (Jackson J. Benson) は、ガイドのウィルソンを脇役兼観察者とみなし、ウィルソンの判断が重視されて、作品全体を左右しているとみている。例えば、水牛狩りで勇敢に堂々と闘う主役の姿も、彼がガイドの価値観を受け入れた証左であるからに他ならない。また、マコーマーの妻が夫を襲う水牛を車上から狙って射ったという結末の描写も、文字通り受け入れられないのは、夫婦の支配関係が逆転するのを恐れた妻が、夫を殺す目的で故意に射ったというウィルソンの感情的な判断に強く影響されているからである。このように、ガイドを影響力の大きい判断を下す観察者であるとするベンソンの見方は、ガイドを審判者や指導者とみるペイカーやスコットの見方とそれほど差がないであろう。

He leads up to the ending by placing a great deal of importance on the judgment of Robert Wilson, so that when Macomber chooses to hold his ground against the charging buffalo rather than run, as he did from the lion, Macomber indicates that he has accepted the value system of Wilson. Macomber at the end of his life chooses to “play the game” and by doing so indicates that Wilson’s approval is more important to him than his wife’s.¹²

しかし、ハンター兼ガイドは、エドモンド・ウィルソンやロバート・ペン・ウォーレンが主張するスポーツマンシップに等しい倫理観や、フィリップ・ヤングの主張する強者の持つ気品を本当に備えているのであろうか。このような掟の基本的な資質を備えているかどうか、掟を体得した人物かどうかを判断する規準となるからである。ガイドがプロのハンターであるだけに射撃の技術を身につけ、猟獣の習性に精通し、サファリの行動規準を心得ている上に、猛獣に立ち向かうだけの度胸を備えていることは確かなようである。キャンプ地までとどろくライオンの咆哮を耳にして、怯えたマコーマーはライオンの居場所がごく近くであると錯覚するが、ガイドは豊富な経験から1マイルほど上流であると判断している。ライオンを仕留めるにはどこを射つべきか尋ねるマコーマーに、首を狙うのが最善だが肩でもよいとガイドは答えている。射撃では一発目が大事であるので、射つべき場所を十分見定めることが肝要であり、射撃距離は狙い射ちのできる100ヤードが限度である、とウィルソンはつけ加えている。

ウィルソンがサファリに関して熟知している点は、射撃すべき獲物の急所のことや射撃の要領のことだけではない。ライオン狩りの最中、マコーマーが車上からライオンを射とうとすると、ガイドはその行動がサファリのルールに違反すると注意を与える。射ち損じたライオンが傷を負ったまま丈の高い草の中へ身を潜めてしまったため、ガイドはライオンを弱らせてから草原の中へ探索に向かおうとすると、怖けづいたマコーマーは探索を回避しようとして、“Can’t we set the grass on fire?” (p. 17)、“Can’t we send beaters?” (p. 17)、“What about the gun-bearers?” (p. 17)などと提案する。草に火をつけることについては草が青すぎることに、勢子を指し向けることについては、傷ついたライオンは人を襲うので、誰かが必ず八つ裂きにされること、そして鉄砲持ちを勢子代りに使うのは契約に反することなどの理由から、ガイドはいずれの提案をも拒否する。ガイドの拒否する理由は、いずれも経験豊かなプロのハンターに相応しい説得力を帯びたものである。その結果、代案に窮したマコーマーは、最後に傷ついたライオンを放置する案を持ち出すが、ガイドはそれをも拒絶して、その根拠を明快に説明する。“For one thing, he’s certain to be suffering. For another, some one else might run onto him.” (p. 18) このようなサファリの常道や専門知識に基づいた論拠や姿勢から判断すれば、ウィルソンはプロのハンター兼ガイドとして必要な知識、倫理、そして資格を十分に有した有能な人物であるように思われ、気の弱い素人ハンターのガイド役や指導者には適格な人物であると認めざるをえないであろう。

しかし、ウィルソンはプロのハンター兼ガイド役として不可欠な銃の腕前とサファリの倫理規準に関しては、本当に信頼に足る人物といえるのであろうか。というのも、ウィルソンに対するこの種の信頼度が問われることになるならば、彼は掟を備えたヒーローと呼ばれる資格を喪失することになるからである。ウィルソンがライオン狩りと水牛狩りに出かけた際に持参した銃は、505口径のギップズ・ライフル銃である。狩猟でこの種の大型銃を使用するのは、ハンター兼ガイドとして異常な行為というべきであろう。大型銃を使用するなら、狩猟は射撃の技術を競う公明正大なスポーツの一種というよりも、銃の威力や性能を試す競争に堕してしまうであろう。この意味で、ウィルソンのモデルにされたといわれるフィリップ・パーシヴァル (Philip Percival) のギップズ銃に関する発言は注目値する。As Philip Percival would later emphasize in an unpublished autobiography, a Gibbs rifle is so powerful as to render its use on safaris unsportsmanlike, which is why he himself had never carried one.¹³ ギップズ・ライフル銃はきわめて威力があり、この銃を使用することは狩猟固有のスポーツ精神に反するため、パーシヴァル自身はこの銃を携帯したことがなかったというのである。しかし、作者は物語の中ではガイドのウィルソンに同じ銃を携行させ、ライオン狩りと水牛狩りで使用させている。その結果、彼の銃を扱う技量は、すぐれた射撃技術に裏づけられているというよりも、銃の破壊力に依存しているといっても過言ではない。

大型銃がなければ、ウィルソンはプロのハンターの地位に居座っていられるかどうかすら、疑問の余地がありそうである。また、ウィルソンはライオンを射撃することや傷ついたライオンの習性をマコーマーに教えているが、スポーツマンシップに反する銃を使用するような人間に、他人を指導する資格があるかどうかすらも問われよう。

ウィルソンはサファリに固有のスポーツマンシップや倫理基準に無知な人物かというところではない。現に、ライオン狩りでも水牛狩りでも、車上から射撃しようとするマコーマーに向かって、ウィルソンはその行為が獲物に対して公平でないため、ルール違反であると強く注意を促しているからである。このように、ウィルソンが必要な倫理観を持ち合わせているにもかかわらず、大型銃を使用して良心の呵責に少しも苦しむことがないのは、リーオ・グアコーがウィルソンの勇気や知性よりも抜け目のない明敏な性質を強調しているように、¹⁴ 自己中心的で狡猾な人物であることを想像させる。水牛狩りの場面は人の変わったマコーマーの姿を具体的に示す他に、ウィルソンの本性を明るみに出すためにも寄与している。ウィルソンとマコーマーは、水牛を車で追いかけて回してから狩り始める。獲物を車で追いかけて回すことは、マコーマー夫人のマーガレット (Margaret) が指摘するまでもなく、サファリではスポーツマン精神に反した卑劣な行為である。この点は、マコーマー夫人の指摘に対しウィルソンが違反を認めて、彼女に口止めすることからも明らかである。

“... Wouldn't mention it to any one though. It's illegal if that's what you mean.” (p. 30)

車で追い回すこと自体卑怯な所業だが、それ以上に問題な点は、ウィルソンがこれを違法行為と知りながら故意に実行していることである。従って、夫人がこの行動を不公平であると非難し、この違法行為が発覚すれば、このままでは済まないのではないかと夫人が仄めかすのも当然といえよう。

“It seemed very unfair to me,” Margot said, “chasing those big helpless things in a motor car.”

“Did it?” said Wilson.

“What would happen if they heard about it in Nairobi?” (p. 30)

サファリのルール違反が露見すれば、失職するなどの深刻な事態が生じることをウィルソンはもちろん承知している。このように、ウィルソンが大型銃というスポーツマン精神に反する手段を用い、車で獲物を追跡するというサファリの倫理基準に反する行為を意図的に行っていることは、ガイドが名誉も道義も欠如したエゴイストで無恥な人物であることを暴露している。このような人間性を見せつけられるならば、掟を身につけた指導者には程遠いウィルソン像が浮かび上がってくるのである。

それ以上に、ウィルソンのコード・ヒーローや指導者としての役割が最も疑問視される出来事は、マコーマー夫人との不倫行為である。ヤングはこの不道德な行為が掟を所有したヒーローの地位を危うくしかねないことに逸速く気づいて、自説を弁護するためこの件を必死に正当化しようとする。というのも、ウィルソンが狩猟以外のことでは、客の基準を自己の基準にしていたという語り手の説明を根拠にして、マーガレットとの密通事件も、狩猟旅行中ダブルの簡易ベッドを持ち歩いている事実も、この男の掟に反するものでない、とヤングは力説するからである。しかし、ウィルソンが客の基準を自己の基準にしていたとすれば、彼の不倫行為はマーガレットを満足させるに

しても、もう一人の顧客である彼女の夫を到底満足させるものではないので、ガイドの基準は実は全く得手勝手な論拠に依拠しているにすぎないことがわかる。ガイドの行動は妻の尻に敷かれている臆病な夫をみくびって、彼の弱みにつけこんだ破廉恥極まりない振舞いである。従って、これは、夫の感情を逆撫して反発を買うか、屈辱を受けた夫を自滅に追いこむ可能性をはらんだ深刻な出来事なのである。事実、この物語の下地に利用されたとジェフリー・マイヤーズが指摘する事件のように、ウィルソンの行為は恥辱を受けた夫を自殺させるという悲惨な結末をも招くので、狩猟と無縁であると割り切るには余りに重大な問題を含んでいる。この行為は人倫自体が麻痺している上に、道義心をも欠落したきわめて身勝手な人間性から生じたものであるというべきである。

この短篇の下地になったとマイヤーズが主張する出来事を知るならば、ウィルソンがその中心人物にきわめて近接した人物であることに驚かされるであろう。マイヤーズによれば、マコーマーの物語は1908年3月にオードレー・ジェイムズ・ブリス (Audley James Blyth) 夫妻を伴って、東アフリカのナイロビからサファリに出兵したが、その最中にブリスを自殺に追いやり、彼の妻と不義密通を犯したイギリス軍大佐ジョン・ヘンリー・パターソン (John Henry Paterson) (1867—1947) にまつわる実話を基にして書かれた作品であるという。¹⁵ ヘミングウェイは1933年から34年にかけて東アフリカへサファリに出かけていた折に、ガイド役のフィリップ・パーシヴァルからこのスキャンダルを聞かされたという。パーシヴァルが同じ話を1950年代にヘミングウェイの息子パトリック (Patrick) にも語っていた、とマイヤーズはいつてヘミングウェイがこの興味深い醜聞をパーシヴァルから確かに聞いていたことを強調している。¹⁶ 利用された実話がヘミングウェイ流に虚構化されていることはいうまでもない。実話に登場する三名の人物はすべてイギリス人であるが、虚構では顧客の夫妻はアメリカ人に変更されている。実話では夫は自殺するが、物語では殺害される。実話では妻の不貞が夫に勇気を喪失させて彼を自殺に追いやるが、物語では同じ行為が夫に勇気を奮い起こさせて、夫の性格と生き方を変える契機となる。実話ではガイド役のパターソン本人の人間性と行動が問題視されているが、物語では夫を裏切り殺害するエゴイスティックな妻マーガレットが悪役に仕立てられている。こうして、ヘミングウェイはパターソンの事件に認められる背信、臆病、墮落などをモチーフにして、勇気と名誉の回復というテーマを再構築したのである。

マイヤーズの主張によれば、実話が虚構化された過程で特筆すべき点は、ハンターのパターソンがヒーローに変更されたことであるという。

He [Hemingway] turned the hunter into a hero; for Wilson's only vice is sleeping with the wife—a prerogative of his job: "What does he think I am, a bloody plaster saint? Let him keep her where she belongs. It's his own fault."¹⁷

マイヤーズはハンター兼ガイド役がパターソンからウィルソンに変えられて、コード・ヒーローの任務を担わされたとみている。しかし、マイヤーズもヤングと同様に、ウィルソンをコード・ヒーローの地位に置く場合の最大の障害が不倫事件であることに気づいており、その扱いに苦慮している様子がうかがわれる。この点は、ウィルソンの人妻との密通が彼の道徳に反する唯一の行為にすぎず、しかも、職業上許容されるべきガイドの特権でもあるとするマイヤーズの苦しい弁明に認められる。換言すれば、マイヤーズはウィルソンが掟の備わったヒーローであるとする前提に縛られているため、人妻とのスキャンダルのみが彼の道徳的汚点であり、他の点では何ら落度がない、とウィルソンの人間性を弁護せざるをえないのである。しかし、ヤングの正当化やマイヤーズの弁護にもかかわらず、ウィルソンを指導者や審判者などとする見方も、コードの確立したヒーローとす

る見方も、額面通り受け取るには問題がありそうである。

ジョゼフ・M・フローラ (Joseph M. Flora) は、ウィルソンの人物像に関する従来の見方を容認できないと主張する。フローラもマイヤーズの指摘するパターソンとプリス夫妻一行のスクランダラスな出来事を簡単に引き合いに出しているが、フローラはウィルソンの人間性については、マイヤーズのように単純にまた好意的に扱っていない。

Robert Wilson is the most self-confident character of the story. He is given to broad judgments. And he does know something about handling fear. He believes in courage and admires bravery. But he breaks the rules of his trade when it suits his purpose. He is also an incomplete man—unable to merge his life successfully with that of another person... Furthermore, Wilson can be dead wrong. Before the bull charges in the climactic scene, Wilson had just pronounced the bull dead. The reader should be wary of accepting his verdict about Margot.¹⁸

フローラはウィルソンのヒーロー性を肯定しようとするマイヤーズの見方とは異なって、積極的ないい方を避けながらウィルソンのヒーロー性を否定しようとする方向に向かっている。ウィルソンは判断力や勇気などの点ですぐれた資質を備えた完全な人間であるかのように受け取られているが、実体は信頼性に疑問符のつく人物であり、彼の判断や見解を鵜呑みにすべきでない、とフローラは読者に注意を喚起しているからである。フローラはウィルソンを人間的にも考え方や判断の点でも、信頼性に欠ける人物であると確信しているため、ヘミングウェイ・コードの問題を持ち出していない。

フローラのウィルソン観は1960年代にすでに洞察されていた見方であり、特に目新しいものでない。実際、ウィルソンをめぐる問題については、当時活発な議論が展開されていたようである。しかし、その後はヘミングウェイ・コードに関するヤングの説と、ウィルソンを観察者や審判者とみるペイカーなどの見解が研究者の間で定式化されたためか、ウィルソンの人物像については多少のバリエーションがあるにせよ、このような見方の範囲を越えていないのは実に不思議である。60年代にウィルソンの人間像を含めて、この物語の解釈をめぐるヤングやペイカーの見方とは異なった方向を提示して注目される業績は、ヴァージル・ハットン (Virgil Hutton) の論文である。¹⁹

ハットンはウィルソンが明敏で鋭い洞察力と判断力を備えた公平な観察者、あるいは勇気、名誉、そして気品を備えたコード・ヒーローであるとする見方をことごとく否定して、人間性の欠如したエゴイスティックな偽善者であると断言する。

Throughout the story, Wilson represents an unwitting hypocrite who harshly judges others on the basis of various strict and false codes that he himself does not follow.²⁰

ハットンはウィルソンが洞察力の鋭い的確で公平な判断力と、人間味あふれた倫理観を備えた人物とは別人であることを明らかにしようと、テキストを詳細に検討している。その結果、ハットンは従来の見解を真っ向から否定して、ウィルソンを偽善者であると断罪するのである。不倫行為を不倫相手の夫に責任転嫁すること、本人は実行しないにもかかわらず、シェイクスピアの文句を自己の信条であるとマコーマーに持ち出して得意になること、水牛狩りでは本人は水牛の正面攻撃を避けるため脇によけて肩をねらうが、マコーマーには最も射撃のむずかしい鼻をねらわせて、水牛的にさせてしまうという判断ミスをして悲劇を招くことなどをその根拠として例にあげている。

また、ウィルソンの偉大な才能は大砲のような轟音をとどろかせる例の大型銃を使用して、ライオンの頭を半分吹き飛ばしてしまうことに例証されているように、動物を残酷に殺すことである、とハットンは皮肉まじりに指弾している。ハットンはこの能力がウィルソンの人間性と倫理観の欠如を証明しており、ヒロイックな勇気とは全く別物であると力説しているのである。

確実で公明正大な判断を下す指導者であるとするウィルソンの人間像が問題視されるので、ウィルソンの掟を学ぶか指導の下で、マコーマーが臆病者から勇敢な人物にみごとに变身するという見方も問われるのは当然の帰結である。ハットンにいわせれば、ライオン狩りで見せたマコーマーの逃亡もガイドの判断ミスに起因することになる。マコーマーは臆病者と疑われるのが嫌なため、ガイドとともにライオンが身を潜めた草地へ渋々踏み入るが、マコーマーから見れば深手を負って狂暴化したライオンを仕末するのはプロのハンターの任務であり、ウィルソンもそれを容認する発言をしているので、ライオンが襲ってきたときにマコーマーがパニック状態に陥って逃げるのも無理からぬことである、とハットンはマコーマーの行動を弁護するからである。このように、ライオン狩りでは、ウィルソンは素人ハンターを相手にするハンティングガイドとして判断を誤り、無能ぶりを露呈したにもかかわらず、常に正しい判断を下す有能なガイドであるというイメージを定着させようとするため、弱腰なマコーマーに自己の責任と恥を一方的に押しつけたのだ、とハットンはウィルソンを糾弾するのである。水牛狩りでマコーマーが恐怖を捨て去ってヒロイズムを発揮し、勇敢な人間に豹変するあの瞬間も、ハットンにいわせれば、兵士が戦闘中に一時的に狂暴になる状態に等しいものであり、ガイドの掟を信奉するか助力によって变身し、短い幸福な生涯を終えるとする見解をきっぱりと否定する。

ロバート・ペン・ウォーレンやフィリップ・ヤングは、コード・ヒーローの掟を習得することによって、また、ベーカーやルイスなどは審判者ウィルソンの指導や助力を受けることによって、マコーマーが臆病な男から勇敢な男へ变身するとみなしている。しかし、マコーマーが「掟を習得する」あるいは「指導や助力を受ける」という見方は、ハットンやフローラの指摘からも明らかなように、ウィルソンの指導力や判断力や人間性を誤解しているか過大評価している結果から生じたものである。実際、ウィルソンのすぐれた指導力や判断力や人間性が肯定され、マコーマーがその影響を受けるという証拠を作品中にみつけたのはむしろかしいであろう。ライオン狩りで大失態を演じた直後のマコーマーに接する夫人の反応は、“Let’s not talk about the lion.” (p. 5) や “It’s been a very strange day.” (p. 5) のように、皮肉と嫌味のこもった意地の悪い調子を帯び、ウィルソンの反応も “... You know in Africa no woman ever misses her lion and no white man ever bolts.” (p. 7) という発言に決定的に示されているように、シニカルで軽蔑的ですからあるので、二人の反応は彼の勇気を削ぎこそすれ、鼓舞する類のものでないからである。従って、マコーマーが臆病な人間から勇敢な人間へ脱皮するのは、ウィルソンの指導や助言のお蔭ではない。この変化はガイドや妻や使用人全員の面前で、襲ってきたライオンから逃亡するという屈辱的な行為をしでかしてしまったことに加えて、そのために妻とガイドから侮辱的な態度を取られたことが、妻の尻に敷かれてきた軟弱なマコーマーの感情を刺激し、彼のプライドを著しく傷つけたことと密接に関係している。事実、二人に対するマコーマーの反応ぶりは、妻を寝取られたプリスのように自責の念にかられて、破滅の方向へ向かうのではなくて、激しく反発する方向へ働いたのである。自らの恥辱を濯ごうとする堅い決意と妻やガイドから侮辱的な扱いを受けたことが、マコーマーの反抗心を引き起こす誘因となったのである。

ライオン狩りの余波以上に、彼の敵対感情を誘発する重大な契機となった出来事こそ、妻とガイドとの不倫行為である。不倫行為のあった朝、水牛狩りに出かける直前の朝食を前にした会話では、マコーマーは妻とガイドに向かって激怒しあからさまに反抗の態度を示す。いつもは気が弱く

て温厚なマコーマーが憎悪と憤怒の感情をあらわにした態度をみせたことは、おそらくこれまでにみられなかった姿であろう。水牛狩りに出かける際にマーガレットをキャンプに残すかどうかをめぐる会話の最中、マコーマーは二人に皮肉のこもった厳しい口調で憤懣をぶつける。

“You’re sure you wouldn’t like to stay in camp with her yourself and let me go out and hunt the buffalo?” Macomber asked.

“Can’t do that.” said Wilson. “Wouldn’t talk rot if I were you.”

“I’m not talking rot. I’m disgusted.”

“Bad word, disgusted.”

“Francis, will you please try to speak sensibly?” his wife said.

“I speak too damned sensibly.” Macomber said. “Did you ever eat such filthy food?”

“Something wrong with the food?” asked Wilson quietly.

“No more than with everything else.” (p. 24)

荒れ狂う夫を押えつけ、嫌悪な零囲気を静めようとして、妻は離婚という切札を持ち出す。しかし、二人の非情な仕打ちに激しい敵愾心を抱いている夫は、もはやこれまでのように妻の支配に屈する弱腰な人とは別人と化している。夫は妻の支配を脱脚し、ガイドに対抗しようとする決意に燃えて、男としての自尊心と独立心を取り戻したため、妻の脅し文句もむしろ逆効果としてしか作用せず、夫の憎しみと憤激を煽るだけである。激昂した夫を黙らせようとする妻の高圧的な口調も姿勢も、ウィルソンに対するマコーマーの反感を露わにした態度の前では何の効果もない。

“If you make a scene I’ll leave you, darling.” Margot said quietly.

“No, you won’t.”

“You can try it and see.”

“You won’t leave me.”

“No.” she said. “I won’t leave you and you’ll behave yourself.”

“Behave myself? That’s a way to talk. Behave myself.”

“Yes. Behave yourself.”

“Why don’t *you* try behaving?”

“I’ve tried it so long. So very long.”

“I hate that red-faced swine,” Macomber said. “I loathe the sight of him.”

ガイドに対する反感を剥き出しにした対抗心が、恐怖を乗り越え依存心を振り捨てた人間へマコーマーを変身させる原動力となったのである。従って、たとえガイドが適切な判断を下し、有益な助言を授ける指導者あるいは審判者であったとしても、マコーマーの変身はガイドの指導や助力とは全く無縁なのである。また、たとえガイドが掟を身につけたヒーローであったとしても、彼の変身はガイドの掟を習得した結果でもない。況して、ガイドが指導者としても掟を確立したヒーローとしても、不適格な人物であるとすれば、マコーマーの変身はガイドの影響とは全く無関係であると断言してよい。

作者はマコーマーが激しい敵対感情を抱くことによって、勇敢な人間に変る過程を他のエピソードを用いて、別の角度から明らかにしている。マコーマーの激しい敵愾心に燃えた反抗意識は、手負いのライオンの心理の動きにみごとに投影されているからである。換言すれば、侮辱した人間に

対して爆発するマコーマーの反感と、深手を負わせた人間に対するライオンの怒りと憎悪の凝縮した敵対感情とが並置されているのである。従って、ライオンが擬人化され、ライオンの視点から己れの心情が語られるのは、マコーマーの心理状況をライオンのそれと重ね合わせようとする試みであるとみてよい。ライオンは狩ろうとしていた二人の人間をしばし悠然とみつめ、やがて二人を無視して歩み始めた途端に銃弾を浴びて、深い傷を受けたまま草むらへ逃げこんで身を隠す。銃弾を受けたライオンは苦痛と吐き気そして憎悪と怒りを全身に凝縮させ、死を恐れることなく勇気の塊となって、危害を加えた人間へ向かって猛然と逆襲する。敵愾心をバネにして優柔不断で臆病な人間から勇気ある人間に変身するマコーマーの姿は、深手を負っているにもかかわらず、殺される運命をものともせず、自己の主体性を邪魔する者に向かって、威厳を失うことなく、堂々と反撃するライオンの姿に集約されているのである。ライオンが深手を負うという不利な条件下にありながらも、痛手を与えた相手に正々堂々と戦いを挑んで敗れることから、コード・ヒーローに認められる勇気と名誉の実体は、このライオンの姿に具体化されているとみてよい。その意味では、マコーマーにとって学ぶことがあったとすれば、それはウィルソンの偽善的な生き方からではなく、敵愾心に燃えたライオンの壮絶な生き様からだったのである。

注

- 1 本文の()内の引用ページ数は、Ernest Hemingway, *The Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953) による。
- 2 Edmund Wilson, "Hemingway: Gauge of Morale," in *The Wound and the Bow* (London: Methuen, 1961), pp. 191-217, and in *Ernest Hemingway: The Man and His Work*, ed. John K.F. McCaffery (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1969), pp. 236-57.
- 3 Wilson, *The Wound and the Bow*, p. 196.
- 4 Robert Penn Warren, "Ernest Hemingway," in *Ernest Hemingway: Five Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner (Michigan State U.P., 1974), p. 79.
- 5 Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: The Pennsylvania State U.P., 1966), p. 63.
- 6 Young, *A Reconsideration*, pp. 63-64.
- 7 Robert W. Lewis, Jr., *Hemingway on Love* (Austin: University of Texas Press, 1965), p. 86.
- 8 Scott Donaldson, *By Force of Will: The Life and Art of Ernest Hemingway* (New York: The Viking Press, 1977), p. 80.
- 9 Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (New Jersey: Princeton U.P., 1952), pp. 189-90.
- 10 Nathan Scott, Jr., "Ernest Hemingway, A Critical Essay," in *Ernest Hemingway: Five Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner (Michigan State U.P., 1974), pp. 212-21.
- 11 Nathan Scott, Jr., "Ernest Hemingway, A Critical Essay," p. 219.
- 12 Jackson J. Benson, *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), pp. 146-48.
- 13 Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge: Harvard University Press, 1987), p. 434.
- 14 And finally the third and dominant figure of the triangle, the well-tempered British guide Wilson. Like the spectator-narrators in James and Conrad, he is both inside and outside the action, taking part in it at decisive moments yet withdrawn enough from the destructive marriage of the Macomers to comment upon it with a shrewdness and clear-sightedness that establishes a quality even more important than his courage, his intelligence. Leo Gurko, *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism* (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968), pp. 197-98.
- 15 Jeffrey Meyers, *Hemingway: A Biography* (New York: Harper & Row, Publishers, 1985), pp. 267

- 75. マイヤーズによれば、パターソンとブリス一行の事件に関しては、イギリス保護領東アフリカの総督に宛てられたパターソン本人の事情説明と、総督の部下が事件を目撃した原住民から得た証言とが食い違っていたという。パターソンはブリスの銃による自殺の原因が体の不調のせいであると主張しているが、原住民はブリスの死の原因をパターソンとブリスの不仲と、パターソンとブリス夫人との不義密通にあることを示唆しているからである。総督の調査報告を受けた植民相は、上院での報告で、パターソンの同義的責任が明らかであったが、上院の一員であるブリス家を護るためと、この事件がスキャンダルになることを回避するため、ブリス夫妻とパターソンの事実関係が隠され、自殺の原因も曖昧にされたという。pp. 268-71.
- 16 He [Hemingway] heard this story from Philip Percival while drinking around the evening campfire (Percival told Patrick the same story in the 1950s). Meyers, *A Biography*, p. 268.
- 17 Meyers, *A Biography*, p. 272.
- 18 Joseph M. Flora, *Ernest Hemingway: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne Publishers, 1989), pp. 79-80.
- 19 Virgil Hutton, "The Short Happy Life of Macomber," in *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed. Jackson Benson (Durham: Duke U.P., 1975), pp. 239-50.
- 20 Virgil Hutton, "The Short Happy Life of Macomber," p. 239.

テキスト

- Hemingway, Ernest. *The Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Charles Scribner's Sons, 1953.
- . *The Sun Also Rises*. New York: Charles Scribner's Sons, 1954.
- . *Men Without Women*. New York: Charles Scribner's Sons, 1955.
- . *Winner Take Nothing*. New York: Charles Scribner's Sons, 1961.
- . *For Whom the Bell Tolls*. New York: Charles Scribner's Sons, 1968.

参考文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer As Artist*. Princeton, New Jersey: Princeton U.P., 1952. 3rd edition, 1963.
- Benson, Jackson J. *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969.
- Donaldson, Scott. *By Force of Will: The Life and Art of Ernest Hemingway*. New York: The Viking Press, 1977.
- Flora, Joseph M. *Ernest Hemingway: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1989.
- Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968.
- Hutton, Virgil. "The Short Happy Life of Macomber." In *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed. Jackson Benson. Durham: Duke U.P., 1975.
- Lewis, Robert W. Jr. *Hemingway on Love*. Austin: University of Texas Press, 1965.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge: Harvard University Press, 1987.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. New York: Harper & Row, Publishers, 1985.
- Scott, Nathan Jr. "Ernest Hemingway, A Critical Essay." In *Ernest Hemingway: Five Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner. Michigan State U.P., 1974.
- Warren, Robert Penn. "Ernest Hemingway." In *Ernest Hemingway: Five Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner. Michigan State U.P., 1974.
- Wilson, Edmund. "Hemingway: Gauge of Morale." In *The Wound and the Bow*. London: Methuen, 1961. In *Ernest Hemingway: The Man and His Work*, ed. John K.F. McCaffery. New York:

Cooper Square Publishers, Inc., 1969.

Young, Philip. *Ernest Hemingway*. New York: Rinehart, 1952. Enlarged and reissued as *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: The Pennsylvania State University Press, 1966.